

**第8回ダムWG (2004.11.10開催) 結果報告**

2004.11.26 庶務発信

開催日時：	2004年11月10日(水) 16:00~18:15
場 所：	京都リサーチパーク 地下1階バズホール
参加者数：	委員 22名、河川管理者(指定席) 24名、一般傍聴者(マスコミ含む) 98名

1. 決定事項：特になし

2. 審議の概要

①河川管理者からの報告と意見交換

○大戸川ダムについて

河川管理者より、資料 2-2「大戸川ダムの治水効果」を用いて説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り(例示)。

- ・大戸川周辺は農地が多く、住宅地の多くは高台にあったように思う。浸水区域図は、メッシュではなく、道路や等高線で区切ったものであるべきではないか(ダムWGリーダー)。
- ・大戸川は土砂の流出が多く、洪水時には河床が大きく変動する。今回の検討では、土砂流出や河床変動について考慮されているのか(委員長)。

←今回の流出計算や氾濫計算では、土砂については加味されていない。今後、土砂流出も加味した上で検討を進めていく(河川管理者)。

- ・資料 1-1 P48~49 で、黒津地点と宇治地点での流量が比較されているが、黒津地点では大戸川ダムの有無によって流量に差が出ているが、宇治地点で大きな差はないように思える。正しいのか。

←黒津地点と宇治地点のグラフは縦軸スケールが違っている。また、天ヶ瀬ダム再開発後の洪水調整があるため、降雨倍率が低い場合、大戸川ダムの効果は実質的にはあまりないということになっている(河川管理者)。

- ・資料 1-1 P8 表 3.2.1 (各洪水による床上、床下浸水戸数と大戸川ダムの効果)に、実績の流量もあわせて示して頂きたい(ダムWGリーダー)。

- ・資料 1-1 P8 表 3.2.1 では、各洪水の実績洪水と 1/100 規模洪水まで引き伸ばした場合の浸水戸数が示されているが、それぞれ何倍まで引き伸ばしているのかもあわせて示して頂きたい。

○猪名川狭窄部上流の目標洪水と対策について

河川管理者より資料 2-1「猪名川狭窄部上流の目標洪水および対策について」を用いて説明がなされた後、意見交換が行われた。主な意見は以下の通り(例示)。

- ・資料 3-2 P1 の表に銀橋地点と小戸地点の実績流量もあわせて示して頂きたい(ダムWGリーダー)。

←銀橋地点には水位観測所がないため、実績流量が掴めていない。小戸地点については、前回の猪名川部会での指摘を踏まえて、現在、計算をしている(河川管理者)。

- ・一庫ダムの利水容量の弾力的運用を検討して欲しい。降雨予測によって 50mm 程度の降雨があるとわかれば、その分をあらかじめ流しておき、治水容量を稼ぐといった運用も可能でないか。
- ・余野川ダムの治水効果の検討結果はいつ出てくるのか。その時には、狭窄部の開削についても、開削の量に応じたいくつかのシナリオを示して頂きたい。

- ・資料 3-2 P6 表 2 では、余野川ダム建設を含む治水対策案が最も事業費のかかる案となっている。余野川ダム建設はやめると判断したということなのか(ダムWGリーダー)。

←あくまで総合治水対策目標洪水を対象にした場合の検討結果であり、昭和 58 年 9 月洪水を

対象にした場合には、一庫ダムの嵩上げや利水容量の振替が必要になるかもしれない。昭和58年9月洪水の対策については、現在、検討を行っている（河川管理者）。

- ・一庫ダムの利水容量振替 179 万 $\text{m}^3$ について議論をすべきだ。河川管理者は検討しているのか。  
←府営水道への振替については、振り替えた場合のハード面（送水管の付け替え 10km、古江浄水場の増改築等）の検討を行っている。府営水道との協議は、現在水需要の精査確認中のため、まだ行っていない（河川管理者）。

#### ○異常渇水対策と琵琶湖水位管理のあり方について

河川管理者より資料 3-2「異常渇水対策および琵琶湖環境改善のための琵琶湖水位管理のあり方と治水上の課題について」を用いて説明がなされた後、意見交換が行われた。意見は次の通り（例示）。

- ・無理に水位を下げているような印象を受ける。昭和 6 年は昭和 14 年より年間降水量は少なかったにも関わらず、なぜ昭和 14 年のシミュレーションでは平成 6 年の水位を下回る結果になるのか。  
←降水量の多い少ないにかかわらず、雨の降り方によって水位は変動するため、平成 6 年よりも水位が低下するという計算結果が出ている（河川管理者）。
- ・平成 6 年の渇水で実施した実績の取水制限を昭和 14 年に当てはめてシミュレートした場合でも、本日と同じような結果になるのか。計算して結果を示して欲しい。  
←今回の条件（-90cm で取水制限 10%、-110cm で取水制限 20%）は、平成 6 年に実施した取水制限と大体同じ内容になっている（河川管理者）。
- ・節水対策や取水制限、維持流量カット等、さまざまなオプションが考えられる。オプションを提案して、それが社会的に受け入れられるかどうかという検討もできるのではないか。
- ・取水制限を-90cm からではなく、-60cm から始めればいいのか（ダムWGリーダー）。  
←-60cm から取水制限を始めるとすると、ほぼ毎年、取水制限をしなければならなくなる。毎年取水制限するためには、合意形成が必要かと思う（河川管理者）。
- ・平成 6 年の渇水でも断水は発生しておらず、現実と懸け離れた検討になっているのではないか。  
←第 4 回ダムWGの資料 1-8-2 別紙 3 でも検討結果をお示しした通り、近年の降雨状況から見ても昭和 14 年が特異なケースというわけではない（河川管理者）。

#### ②ダムWG報告に向けて

今本WGリーダーより、当日配布資料「ダムWG報告（案）骨子」の概略について説明がなされた。

3. 一般傍聴者からの意見聴取：一般傍聴者 4 名より発言があった。主な意見は以下の通り（例示）。
- ・大川の維持流量をカットすれば、異常渇水はクリアできる。昭和 14 年の渇水シミュレーションで、BSL-90cm から大川の維持流量を 10 $\text{m}^3/\text{s}$  カットすれば 1 億 3000 万  $\text{m}^3$  になる。維持流量カットによって塩害が発生する可能性があるが、水資源機構の資料を見る限り、問題が起きるとは思えない。
  - ・資料 1-2 に川上ダムの引き伸ばし洪水が出ているが、単純に引き伸ばしており、実際にはあり得ない降雨だ。河川砂防基準は、引き伸ばすことによって不合理が生じる場合には修正を加えるものとしている。また、昭和 40 年の降雨パターンにおいては、上野遊水地への越流が行われれば、氾濫はまったく発生しない。川上ダムが必要としている河川管理者はナンセンスだ。
  - ・水資源機構の琵琶湖周辺のための琵琶湖治水というパンフレットには、排水ポンプの効果が非常に大きいと書かれている。実際に効果のある対策を行うべきだ。
  - ・毎年取水制限をすれば、地域や自分でできる節水をしていこうという議論になってくるだろう。河川管理者は勇気を持って、毎年取水制限をするという広報をしていって欲しい。